

Library Navigator

Special Feature 1

「学習図書館について」座談会

Special Feature 2

「働き方・生き方」本特集

CONTENTS

- P.2** 大学生のうちに読んでおいてほしい本
- P.3** [PICK UP] 開講期の開館時間が8:30になりました!
衣笠図書館書庫が学部学生に開放
- P.4** [特集1] 「学習図書館について」座談会
- P.9** [特集2] 「働き方・生き方」本特集
- P.15** [連載2] 学生の学生による図書館活用術
- P.16** Information
図書館レファレンス(利用相談) サービスとは!?
展示コーナー紹介

立命館大学
図書館だより

2009.11
108

大学生のうちに 読んでおいてほしい本

vol. ⑤ 廣瀬 幸弘 先生 (共通教育推進機構 教授 / キャリア教育センター副センター長)

今号はコレ!



どんな仕事をするんでも『自分流』にこだわることを考えろ

『14歳からの社会学 これからの社会を生きる君に』

宮台 真司 著(世界文化社) 2008年

大学生の「活字離れ」は、いったいつから始まったのだろう。最近の大学生は本を読まない。新聞も読まない。それどころかマンガさえも読まなくなってしまった。電車に乗っていても、かつてのように大学生がコッパンをかじりながら食い入るように文庫本をむさぶり読んでいる姿を見ることはほとんどなくなった。(いったい、いつの時代やねん!)

現在、21世紀の電車の中では、大学生はもちろんのこと20代の若者のほとんどが、紙媒体にふれることはなく携帯メールや、DSおよびiPodなどの電子媒体のみに没頭しているのだ。

このままいけば出版社も新聞社もあつという間に絶滅してしまい、本も新聞も地球上からきれいさっぱりと消滅してしまうかもしれない。そうなれば未来の人々は、いずれ電子画面の上だけで文字を読むようになるにちがいないであろう。

そう思うと少々暗澹たる気分になってしまうが、まだ希望が失われたわけではない。とりあえず、立命館大学の学生だけでも本を読む楽しさや意義を知ってもらい、本を愛するようになってもらう。そして彼らの子供たちへ本の持つ素晴らしさを継承してもらえさえすれば、人類の未来はいずれ明るく輝くようになるかもしれないではないか。(少し元気になってきた)

さて、「大学生のうちに読んでおいてほしい本」である。お薦めの本は山ほどあるが編集者から1つだけにせよとのことなので、ちょっと相当に迷ってしまった。とりあえず、「何を書いてあるのか難しくてよくわからない本」や「見たことない漢字や専門用語がいっぱいある本」はやめることにした。(とにかく、

読んでくれないと意味ないじゃんということである)

そこで、最近読んでいた気に入った本を1冊紹介したいと思う。

宮台真司(首都大学東京 教授、社会学者)の書いた『14歳からの社会学 これからの社会を生きる君に』という本である。

宮台真司は、今をときめく人気の社会学者である。彼が展開する論法はちょっと相当に型破りで突飛なところもあるが、きわめてシャープで鮮やかな切り口を見せてくれる。しかし、宮台の著書は「活字離れ」した大学生には少々骨があり難しいかもしれないが、この本はそうではない。なんといっても「14歳からの社会学」である。難しい漢字にはふり仮名が付けられ、用語解説も懇切丁寧である。しかし、内容はきわめて高度であり現代社会学のエッセンスを非常にわかりやすく興味深く書いてくれているのである。「14歳から」とはいえ、大学生はもちろんのこと現在51歳の私が読んでも充分面白かったしめたためになった。とくに、これから社会に生きる大学生にはぜひ読んでもらいたい本である。

本の内容について少し紹介すると、第4章の「君が将来就く仕事と生活について」が非常に面白い。宮台は、これから社会にでて仕事に就く若者に「自己実現できる仕事があるという考えを捨てろ、そうじゃなく、どんな仕事をするんでも『自分流』にこだわることを考えろ」と警告する。

宮台が展開する議論は、常識にとらわれず本質をシャープにとらえて読者を魅了する。どうか、図書館で借りて読んでほしいが、ぜひ本屋で買って何度でも読み返してほしい本である。「活字離れ」した大学生を大きく変えるパワーに満ちた本を堪能してほしい。

開講期の開館時間が8:30になりました!

衣笠図書館、メディアライブラリー、メディアセンターが開講期には8:30から利用できるようになりました。1時限目の授業開始前に資料の貸出しや閲覧室での授業準備などができるようになります。ぜひご利用ください。

[開館時間]

	平日	土曜日・日曜日
開講期間 (注2)	8:30~22:00 (注1)	10:00~17:00
開講期間以外	9:00~19:30	10:00~17:00

(注1) レファレンスカウンターおよび衣笠図書館の書庫の利用は9:00からです。

(注2) 補講日となる土曜日・祝日は9:00~19:30です。

詳しい日程は、図書館ホームページの開館スケジュールもしくは館内配布の日程表でご確認ください。



衣笠図書館書庫が学部学生に開放!

2009年4月より学部学生が簡単な手続きだけで書庫に入庫できるようになりました。衣笠図書館の蔵書数は約85万冊で、そのうち書庫には約60万冊が所蔵されています。書庫には、受け入れから一定年月が経過した資料等があります。閲覧室では見つけられなかったような資料が利用できるかもしれません。みなさんの学習にぜひお役立てください。



◀ 衣笠図書館書庫

館長 × 学生 学習図書館について

大学時代は将来を見すえながら、必要な知識や能力を磨き、鍛える時期です。

とりわけ生涯に渡って「学ぶ」場として、図書館は学術情報基盤を整備し利用者教育や各種サービスによって、学生をサポートしています。今回は図書館長の吉田美喜夫先生（法学部教授）（以下「館長」）と学生4人による座談会を行いました。

皆さんと同じ学生が普段どのように図書館を利用しているのか、また吉田館長が考える大学生生活における図書館の存在意義や重要性について語り合いました。

皆さんは「ラーニング・commons」という言葉を知っていますか？ その答えは座談会の中にあります！

館長 それでは、早速座談会を始めたいと思います。皆さんは入学してからこれまで、あるいは最近に限っても結構ですが、普段どのように図書館を利用していますか？

北迫 高校まではあまり本に興味がありませんでしたが、大学に入ってから本を読んでもよいと思い、図書館へ足を運びました。実際に行ってみると雑誌も多くあったので、まず雑誌（経済誌）から読み始めました。興味があれば経済関係の専門書も読んでいました。主に授業の空き時間に利用することが多かったです。

就職活動を意識し始めた3年生頃からは、就職活動に関するビデオなども利用しました。多いときは毎日図書館に通っていました。

藤村 私は本を読むことは小さい頃から好きだったので、大学に入ってから自然と図書館を利用していました。先生が授業で薦

めてくださった本を読んだり、マルチメディアルームでレポート作成をしたりと、ほぼ毎日図書館に通っていました。ただ、4年生になって研究室に入ると、研究のために本を借りることが少なくなり、図書館に行く回数は減ってしまいました。逆に研究室にある資料を読むことが多くなりました。

館長 なるほど。そうですね。お二人の話を聞いていると、学部によって、あるいは学部生と院生によって、勉強のスタイルと図書館の利用の仕方が違うという特徴が挙げられますね。図書館と研究室というように場所は違っても、文献等の資料は利用しているということになりますね。

北村 1、2年生の頃はゼミなどで必要に迫られて利用することが多かったです。3年生になると就職活動が始まるのでデータベースや新聞検索などを利用するために必

要に応じて利用していました。

4年生になると、ふらっと足を運んで小説を手にとってみたり、種類が豊富なので、興味を持った専門書を読んだりしています。どちらかという、借りて帰るより来て続きを読むという読み方が多かったです。回数によって利用の仕方が変わってきたのかなと感じています。

植田 私は本がずっと好きで、1、2年生の頃は文庫新書コーナーが充実しているので、興味のあるタイトルの本を手にとり、読んだり借りたりということをしていました。

2、3年生からはゼミの準備や、興味のある日本史の専門書を読んだり、書庫が開放されたので書庫内に自分の研究に関係がある資料がないかを探したりしています。

ゼミ発表前になると、毎日閉館時間ぎりぎりまで残って準備をしていたりしました。普段は週に1、2回利用しています。これからは就職活動が始まってくるので、進路・就職本コーナーを見えています。

館長 学問分野によって利用形態は違うけれども、かなり日常的に書物に触れているといった印象ですね。日常的に図書館が大事な場所として生活の中に溶け込んでいるという感じがしますね。

私が学生の頃（1968年入学）はほぼ毎日図書館に通っていました。今よりもっと授業のコマ数が少なく、ゆったりとした学生時代を過ごしていました。美術や芸術、写真など、ビジュアル系の雑誌を読むことが好きでしたが、個人では高くは購入できない

3年生



植田 珠揮さん
文学部 人文学科 3年生

4年生



北村 有希さん
文学部 人文学科 4年生

ようなものが中心でした。そういった資料が揃っているということからも大学図書館は「天国」「オアシス」のような場所でした。

ところで、日常「本を読む」場所はたくさんあると思いますが、「図書館」という場所で本を読むことに、皆さんはどのような意味を見出していますか？

北迫 僕は図書館で本を読みふけるということはあまりしたことがなく、レポートのための文献を部分的に拾い読みしていることが多いです。

藤村 私も基本的には本を借りて家で読むことが多いです。ただ、雑誌など館内利用の資料は読みたいものを何冊かまとめて持っていき、図書館内で自分のお気に入りの場所で読んでいます。

北村 私は、授業の準備で資料を読んだり、小説を読むときも、自宅ではTVなどの誘惑に負けて集中できないので、他の学生さんが頑張っている姿が見れたりするなど、良い意味で緊張感のある図書館で自分を集中させるために利用していることが多いです。

植田 私も北村さんとはほぼ同じ意見で、図書館は静かで集中できる場所なので、専門書などの頭を使う本は図書館で読むようにしています。小説はリラックスしたいので、家で読むことが多いです。

館長 図書館の機能や役割が今の皆さんの話でかなり具体的に言い表せたのではと感じています。図書館は膨大な書物がある場所です。各館において膨大な資料を目の当りにできる。つまり、研究・創造など、人が営々と作り上げてきた営み・エッセンスが詰まっている場所です。

そういう場所に身をおくだけで圧倒される雰囲気がある。そういう場所、つまり環境という点でも図書館の意味があると私は考えています。

皆さんは「司馬遼太郎記念館」を知っていますか？ 中に入ると天井まで3階建てくらいの吹き抜けがあり、天井までが壁面全て本で埋め尽くされています。それは司馬遼太郎が小説を書く上で集めた資料なん

ですが、それを見ていると、「司馬遼太郎は小説を書く上でこんなにも勉強していたのか!？」ということに驚かされます。同時に人間は本当にすごいことができる存在だなと感じることができます。

そういう意味でも「図書館は人を育てる」といえると思います。そういう環境に若いうちから長く身を置いた人は意識するしなに関わらず、良い影響を図書館から受けているのではないかと思います。

また、皆さんに期待したいのは、周りの人が勉強している姿から学ぶということですね。

たとえば、司法試験合格に向けて勉強する際に、やはり自分ひとりで勉強するのは困難です。しかし、図書館で勉強していると同じような人が周りにもいるんですね。そういった朝から閉館時間まで勉強しているような人の勉強ぶりから自分なりの勉強の型を探ることもできます。するとおのずと学びの相乗効果が出てきます。それは、映画を家で見るのと、映画館で見るこの違いと同じようなものかもしれません。図書館では勉強している人の息遣いが聞こえてきます。そういった場所としての魅力も図書館にはあると私は思いますが、皆さんはどうですか？

北迫 友人が勉強している姿を見て、自分も頑張ろうと思えた経験はあります。

藤村 試験期前には図書館では多くの人が必死で勉強しているので、そういった姿を見て、自分も頑張ろうと刺激されることはあります。

植田 私も図書館に行ったら周りが勉強している姿を見ると自分も勉強する気になるので、試験期間中の休みの日でも利用しています。

館長 先程先人の努力に圧倒されると言いましたが、こういった印象を持つためには「開架式書架」だけではある種限界があるんですね。衣笠でいえば、最近学生にも開放された「書庫」を利用することが大切になってきます。戦前における図書館は「研究のためのものである」という意識と比べて、近

年は考え方も変化してきて、学生も自由に利用することができるようになってきました。これは、図書館の長い歴史からみても「図書館の民主化」といえるのではないのでしょうか。より多くの人々が自由に書物に触れることができるというのは、人類の歴史においても非常に素晴らしいことだと思います。「学習者を中心に据えた図書館」のあり方を自由に語れるような段階に来ているといえると思います。

また、「書庫」を含めた図書館の魅力の一つは「蓄積された膨大な資料」を整然と並べていることです。蓄積した資料を目にすることで、そこに到達するまでの人々の営み・努力を感じることができます。そういったものをぜひ皆さんにも味わって欲しいですね。

話は変わりますが、皆さん「ラーニング・コモンズ」という言葉を聞いたことはありますか？

—皆さん聞いたことは無いようですね。それでは語る値打ちがありますね。(笑)

まずラーニング・コモンズの言葉の意味ですが、「コモンズ」とは「共有地」・「社会的共通資本」さらに言えば「入会地」というようなみんなが自由に使える場所ということです。ですからラーニング・コモンズとは「学習のための）学びの共有地」ということになります。

この考え方の下で、図書館のあり方を考えていこうという潮流が1990年代から起こってきているのですが、これは図書館の民主化の一つの到達点であり、方向性を示すものであると私は理解しています。

館長



吉田 美喜夫 先生
法学部教授・図書館長

つまり図書館というものを「学びの共有地」にしよう、そこで色んなことをみんなで学んでいこうということですね。このような考え方の背景には「情報化」が挙げられます。図書館が「書物」という形でのサービスだけでなく、いわゆる「情報」を提供する場所にもなってきたことから「ラーニング・コモンズ」というコンセプトが出来上がってきたんですね。さらに「人的支援をする」ということが欠くことのできない「ラーニング・コモンズ」の要素なんですね。ここでいう人的支援とは、あるテーマについてどうアプローチしていくのかという「学び方」まで支援することを含んでいます。アメリカの場合だと、就職支援や起業支援といったことまでサービスとして行っているんですね。

これを大学に引き付けて考えると、皆さんの日常的な学習・報告・論文を書く、進路就職を考える際の情報提供といった支援・機能を図書館に組み込んでいこうというのが、重要な要素となってきます。そして、その人的支援の中に学生・院生の皆さんも関与していくことが非常に大切になってきます。例えば、ES・TAとして、学生が論文を書くときの指導をする、または選書や施設配置といった学びの環境を考えるアイデアを出してもらうことも必要になってくると思います。加えて図書館を「プレゼンテーションする場」とすること、図書館で学んだことを、図書館を発表の場にして他の人に伝えていくことも大切になってくると思います。例えばゼミ発表や研究発表ができるような施設面での整備も大切だということです。

今話を踏まえての感想や意見は何かありますか？

北迫 ラーニング・コモンズにおける人的支援の一環として僕たち学生ライブラリースタッフ（以下LS）も深く関わってくるのかなと思いました。図書紹介やRUNNERS検索講座といった現在LSが行っていることの拡充が必要となってくるのではないかなと思いました。また、質問なのですが、卒業生は卒業後図書館を利用することはできるのでしょうか？ こういった施設・サービスが実施されるなら、卒業してからでもぜひ利用したいのですが。

館長 必要な手続きをいただければ無料で利用できます。つまり、そう考えると大学との付き合いは「生涯続く」ということがいえますね。他の皆さんはどうですか？

藤村 図書館がプレゼンの場として使えるようになることは大切だと思います。これまでの図書館は一人で行って黙々と勉強する場というイメージがあり、ある意味窮屈でしたが、プレゼンができるような場所となることで人が集まって活気づく場所になるのかなと思いました。質問なのですが、情報化によって図書館に人が集まりにくくなるのではとも思いますが、どのようにお考えですか？

館長 その点はおっしゃる通りですね。つまり図書館と情報化の進展をどう統一するかというのは世界中の図書館が抱えている

課題の一つですね。書物を読む上でわざわざ図書館に足を運ばなくても良いのではないかという考え方も勿論あるかと思いますが。しかし、繰り返しになりますが、図書館というのは資料がその場にあるということだけで利用者に影響や刺激を与えることができると思いますね。これはどれだけ情報化が進んでも、あるいは進めば進むほど、逆に図書館のような場所は必要になってくると思いますね。

最近図書館を考えたときに、「空間」という概念を用いて図書館をどのように展開していくかについて議論が頻繁に行われる最大の理由は、「情報」には空間が無いということです。目に見ることもできません。逆に空間に身を置くことによって、電子媒体にはない多くの情報を得ることができるんです。

これは大学の授業も同じです。なぜTV等を使った遠隔授業ではなく、わざわざ大学に足を運んで、授業を受けるのか。他の学生がいることも大切な理由です。もう一つ、「現場」にいるということに非常に大きな意味があります。TVなどの画面から得られる情報は多い一方で実は非常に少ないんですね。逆にその場に身を置くことで、周囲の雰囲気や状況などの情報を得ることができます。

書物も多くの参考文献から書かれており、その参考文献も多くの参考文献から書かれていますよね。これが人類の知識経験として集約されており、それが「書物」として今我々が利用できる状態で目の前にある。そのことを学ぶには電子媒体では難しいものがある。情報化と図書館のあり方には矛盾があるように思いますが、これを積極的に利用する、活かすことが重要であると私は考えていますが、皆さんどうですか？

北村 学生の関与は非常に面白いと思います。学び方の支援について、立命館大学で具体的に何ができるのかについて、館長先生はどのようにお考えですか？

館長 その点については、これから議論していくところではありますが、私としては、支援の中身、誰が支援していくのかをしっかりと考えていくことが大切だと思ってい

2 回生



藤村 紗矢さん

理工学研究科 創造理工学専攻 2回生

4 回生



北迫 俊明さん

経済学部 国際経済学科 4回生

ます。理想はいわゆるワンストップサービスです。そのカウンターに行けば何でも相談に乗ってくれるというようなシステムが理想です。ただすぐには無理だと思います。そのためには当然人を育てる必要がありますし、知識や経験を集約していく必要があります。本学のオリターやエンター、TA、ESといったように組織的に経験を蓄積していき最終的にそのようなものができればよいと考えています。当面は内容ごとに個別対応していけるシステムが現実的だと思います。

植田 私も学生独自の視点を活かせるのでもいいと思います。LSがその一翼を担っていければ良いと思います。ただ、どの程度「学び」を支援するのかが非常に難しい問題だと思います。支援として、学生に親切にしすぎるとその人自身の力がつかなくなるのではないかとはいえと思いますが、その点についてはどのようにお考えですか？

館長 そこはものすごく難しい問題ですね。「立命館教育大学」といわれるくらい「おせっかい」だと言われることもあります。しかし、あくまでも我々がやっているのは自立を促し、支援をするというサービスですね。つまり、本人に力をつけて自分で自立して学んでいけるための支援です。学ぶ主体を作り上げていくことが目標であり、大切なことですね。しかし、言葉にするのは簡単ですがそれを実施していくのはなかなか難しい点ではありますよね。我々が提供することは「サービス」、真の意味での「奉仕」であって、「おせっかい」であってはいけないということは重々留意する必要があります。

このようにコンセプトとして「ラーニング・コモンズ」という考えがまとまってくると、今後、より具体的な枠組みを考えていくこととなりますが、これに関わって、一つ皆さんに聞きたいことがあります。図書館での飲食についてはどう思いますか？

北迫 利用者としては水も飲めないのは困りますが、LSとして本を配架する立場としては大切な資料が汚損する危険があるのでやめてほしいという思いもあります。複雑な心境ですね。



藤村 長時間いる時に飲食禁止はやはり困るときもあります。図書館内を区画してメリハリをつければ今後実現可能ではないかと思っています。

北村 食べることには積極的ではないんですが、せめて飲むことは可能にしてほしいです。図書館の中にカフェテリアを作っている大学もあるので空間をうまく利用していければよいと思います。

植田 長時間試験勉強をしたりしていると、のどが渇いたり、お昼をはさむこともあるので、閲覧室の外に食堂のような、飲んだり食べたりできるような施設があれば良いかと思っています。

館長 私が考えるラーニング・コモンズの要素には、先程のものに加えて、カフェ的な空間という性質を持たせる必要があるのではないかと考えています。なぜなら、「コモンズ」は人々が自由に出入りする場なので、そこにコミュニケーションが成立しますよね。そういったコミュニケーションというのは非常に重要なものですので、それを発展させていくためにも、くつろぎつつ世間を広める空間にしていく必要があるのではないかと考えています。

こういった話はまだ議論の途中ですが、他大学の先行事例から学びつつ、立命館でも活かすという考えの下、スピード感を持って取り組んでいく必要があります。学習機能を重視していくことは、おのずと各学部で行われている教育・研究と連携し

ていくことが重要なテーマとなってきます。総合大学としての強みを活かし、学びの空間を作っていくことが重要となってくると思います。

最後に一言申し上げたいと思います。まず、図書館は変化・発展するものであり、固定的なものではないということですね。図書館は日々進化しているということです。そして、大学図書館ですから、当然大学のあり方と結びつけて考える必要があります。具体的には、教育の質保証や学習者中心の教育、あるいは学びのコミュニティと図書館のあり方を結び付けていく必要があると思います。

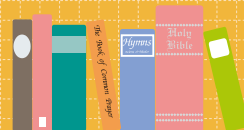
加えて、大学は教育と研究が分かちがたく結びついている教育機関でなければならぬという認識が大事だと考えています。研究と学習（教育）の双方向で図書館を考えていくことが重要なのではないのでしょうか。

今まで以上に、大学教育において図書館が中心となって図書館の教育力を発揮し、さらには図書館を大学の教育改革をリードする砦と考えていく必要があると思っています。

また、これからは利用する皆さんが参加・関与して図書館を作り上げ、学びあうことが大事だと思います。これからぜひ学生の皆さんが友達同士で、「図書館に行こう」、「図書にいけば何か得られる」という大きな動きを作ってほしいと願っております。本日はありがとうございました。

北迫 藤村 北村 植田
ありがとうございました！

「働き方・生き方」本特集



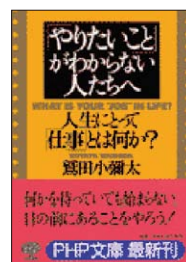
法学部 法学科 3 回生 廣田 将之さん

『「やりたいこと」がわからない人たちへ』

鷺田 小彌太 著 (PHP 研究所) 2001 年

みなさんは「自分がやりたいこととは何なのだろう?」という悩みを持ったことはありませんか? 私も同じ悩みを持った時にこの本に出会いました。この本では自分が置かれている立場や状況から次に進める方法や、「今」ということの大切さを説明し、自分がこれからどうすればいいかという道をいくつか教えてください。また、説明も論理的で分かりやすく、納得しやすい内容となっています。

「自分がやりたいことが分からない」、「将来はどうしたらいいのだろう」などとそんな悩みを持っている人はぜひともこの本を読んでください。必ず力強い味方になり、自分の将来への道が切り開かれていくと思いますよ!!



産業社会学部 現代社会学科 3 回生 三宅 美歌さん

『日本でいちばん大切にしたい会社』

坂本 光司 著 (あさ出版) 2008 年

「社員の幸せが第一」。働くなら、そんな会社で働きたいとは思いませんか。

本書では「顧客主義」「経営第一」の風潮の中で、懸命に志を貫く5つの会社を紹介しています。「重度の障害者を優先的に採用する」「社員の安全のために莫大な設備投資をする」などの話からは、経営者の優しさがひしひたと伝わってきます。「優しいばかりでは競争社会を生き残れるわけがない」と思いつつも、何度か目頭が熱くなりました。

本書を通して、会社が多くの人に影響力をもつ存在であることを実感すると同時に、「誰のために働くのか」を深く考えさせられます。経営者を目指す方はもちろん、心温まる話が聞きたいと思う方にもぜひ読んでいただきたい一冊です。



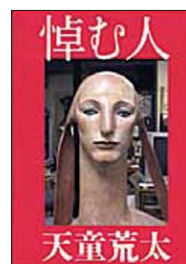
文学研究科 人文学専攻 1 回生 岡澤 沙樹さん

『悼む人』

天童 荒太 著 (文藝春秋) 2008 年

坂築静人は死者を「悼む」ために全国を放浪して回っている青年。愛憎渦巻くゴシップ記事を書くのが得意な週刊記者である蒔野と、夫を殺した罪で服役し、出所したばかりの侍世が静人に深く関わっていきます。そして、末期の胃癌に冒された静人の母巡子は、ひたすら静人が帰ってくるのを待っています。

静人の「悼む」という行為は理解しにくいものです。しかし一方で「死ぬとはどういうことなのか。残された人はどのように生きればいいのか。」ということを考えさせられます。一つひとつの命を慈しむことの大切さを教えてくれる本作品は、悲しい事件が多過ぎるこの世の中に必要な一冊ではないでしょうか。



皆さんは一冊の本との出会いによって、自分の人生の考え方・価値観が変わったという経験はありますか？

今号では、働き方、生き方を含め、自身のキャリア形成を考える上で影響を受けた本を、様々な学部生・院生から在学生の皆さんに向けてコメント付きで紹介しします。

また、衣笠図書館・メディアライブラリー・メディアセンターには、「立命館大学父母教育後援会」のご支援により、「進路就職コーナー」を設置しています。進路・就職や資格取得を支援する図書は勿論のこと、皆さん自身のキャリア形成、働き方、生き方を考えるきっかけとなる図書も提供しています。皆さんもぜひ、お気に入りの図書を図書館で探してください。



国際関係学部 国際関係学科 3回生 月見 友哉さん

『自助論』

サミュエル＝スマイルズ 著 竹内 均 訳 (三笠書房) 2003年

「天は自ら助くる者を助く」

困難に直面して挫けそうになったとき、私はこの言葉を思い出します。スマイルズの『自助論』はコペルニクスやケプラー、ニュートンなど著名な偉人のエピソードを交えて、この自助の精神を説いています。勤勉・努力・正直・人格などの重要性を改めて確認することができる本です。原書は1858年に刊行され、明治の日本で青年を中心に100万部以上売れたと言われています。1858年刊行の古典ということから苦手意識を持つ人もいるかもしれませんが、本書は平易な現代語で訳してあるため、古典に対して苦手意識のある人も読みやすいと思います。今後どのように生きていくかを考える上で参考になる本と言えます。



政策科学部 政策科学科 4回生 西岡 毅さん

『沖縄独立宣言：ヤマトは帰るべき「祖国」ではなかった』

大山 朝常 著 (現代書林) 1997年

この本は筆者の生き様について書いた本であり、教師であった筆者は沖縄戦で多くの教え子を戦場に送り、家族のほとんどを沖縄戦で亡くし、戦後コザ市長として危険を冒して祖国復帰運動に積極的に関わったにも関わらず、沖縄の祖国復帰後の、アメリカの植民地状態の沖縄の現状に大きな幻滅を抱きました。彼の書く文章からは祖国沖縄への強い愛や自身の意思を来世まで残さないといけなという強い意志が感じられました。私自身、自分の生まれ育った土地や日本という国にあまり愛着がなかったので、強い意志をもって日本の将来を考えることはなかったのですが、それでは筆者が味わった苦しみが再び起こるかもしれないと思い、もっと自分の国について知ろう、また選挙にも積極的に行こうと思ったきっかけになった本です。



産業社会学部 現代社会学科 3回生 須田 玲奈さん

『キミが働く理由』

福島 正伸 著 (中経出版) 2009年

私は、3回生になり、「就職」を意識し始めました。しかし、なかなか就職活動に力が入らなかったのです。

なぜなら「自分が一体どんな仕事をしたいのか」「働くことの意味とは何なのか」がわからなかったため、「就職」に魅力を感じなかったからです。そんな私の「就職」に対する悩みを、この本が打ち消してくれました。この本は、働く理由を考え続け、20万人の生き方を変えた著者からの25のメッセージから成り立っています。それらメッセージには自立して生きていくためのヒントが含まれており、私はこの本から、仕事が楽しくなる考え方を学びました。就職活動を始める前や、就職活動中に行き詰ってしまった時に、ぜひ読んでほしい一冊です。





「働き方・生き方」本特集



政策科学部 政策科学科 4回生 櫻井 野衣さん

『妹たちへ』

日経WOMAN (日本経済新聞出版社) 2008年

自分が働く姿を想像するとき、つつい活躍してキラキラと輝いている姿を描いてしまう。しかし、現実には厳しく、世界不況の煽りを受け未曾有の就職難、特に女性には厳しい環境で、希望する業界や職種から内定をもらうことが難しい状況…将来について不安だらけで輝かしい姿とは縁遠い今の自分。そんな私に力強さとしなやかさ、女性だからこそできることがあると教えてくれたのが、『妹たちへ』でした。

様々な業界で活躍していらっしゃる先輩方の失敗談や物事の捉え方、そして私達後輩へ向けたアドバイス、みんな失敗し考え立ち直って「なりたい自分」になっていくことができる。上手いかわないことだらけの私達への応援にみち溢れた一冊です。



文学部 人文学科 2回生 福田 宏美さん

『はたらきたい。：ほぼ日の就職論』

糸井 重里 監修 (東京糸井重里事務所) 2005年

進路決定、就職活動。人生の大切な局面になればなるほど、不安になることはありません。受験や面接に向けて努力すればするほど、自分の本当にしたいことがわからなくなって焦ってしまうことはありませんか。

自分のしたいことって本当にこれかな？ 本当に自分は「はたらきたい」のかな？ そんな問いに一生懸命答えてくれるのがこの本です。

この本には、面接で気に入られる受け答えや、採用されやすい服装やお辞儀の角度は載っていません。けれど、必ずあなたの「はたらきたい」という気持ちや「はたらきたくない」という気持ちにまで寄り添って「大丈夫だよ」と言ってくれます。働くことについて考える全ての人に読んで欲しいです。



産業社会学部 現代社会学科 3回生 北原 功樹さん

『二十歳の原点』

高野 悦子 著 (新潮社) 2003年

この本は、ある大学生の日記である。彼女は残念ながら自殺してしまい、その死後に発見された彼女の日記を、父親が出版したのである。

そこに記されているのは、日々の出来事や彼女の心情である。その点では、私たちの日記となら変わらない。しかし彼女の日記はそれだけではない。その中には心の深くにまでおよぶ内省が綴られており、自己との対話、対決、葛藤が繰り広げられているのである。

その一方で、自分にはそのような深い心の内への反省がないことに気づかされた。頭を占めるのはいつも外のことばかりで、自らを省みる機会が、いかに少ないことか。彼女がこの日記を書き、また命を絶ったのは立命館大学の三回生のときであった。彼女と私は同じ肩書きを持ちながら、全く違う心の世界を生きていたのである。

そんな私に、自らの心を振り返ることの大切さを改めて気づかせてくれたのが本書である。今、同年代にある私たちが読めば、必ず何かを気づかせてくれるはずである。ぜひ多くの大学生に読んでいただきたい。





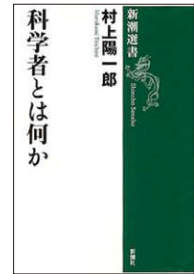
経営学部 経営学科 4回生 江田 佳菜子さん

『科学者とは何か』

村上 陽一郎 著 (新潮社) 1994年

高校1年生のとき、現代文の宿題で出会いました。

本書は科学者の歴史とその功罪をたどり、社会の中で科学者がどうあるべきかを問いかけています。一見よいと思われることを、色々な角度から様々な知識を集結させて検討し、総合的に判断することが科学技術の発展には不可欠であるということに気付かされました。起こりうる未来を幾つも想像する力をもって科学と付き合わなければ、原始爆弾や環境汚染などの悲劇は繰り返されることでしょう。科学に携わる理系の学生はもちろん、文理を問わずお薦めしたい一冊。多様性のある視点と豊かな感受性で世の中を捉える頭と心を育み、自分たちが生きてゆく未来そのものを考えるきっかけになると思うからです。



経済学部 経済学科 4回生 片山 由衣さん

『部下の哲学』

江口 克彦 著 (PHP 研究所) 2005年

就職活動の先には何が待ち受けているのか、社会人にとって大切なことは何か、想像できますか? 本書には、部下の立場における社会人の心得が書かれています。内容は、筆者が長年培ってきたビジネスマンとしての人生観です。と言っても、「勉強、努力をする」「目標を立てる」など、学生にもあてはまる、ごく当たり前のことばかりです。けれど、その当たり前のことをなぜ守るべきなのか、その理由を本書はじっくりと噛み砕いて教えてくれます。

就活を経て、社会人としての自分に不安を感じる上回生に、ぜひ読んでもらいたい一冊です。また、本文中の「仕事」は「勉強」に置き換えて考えることもできます。大学生活をより有意義に過ごすための指南書としても、全回生にお薦めします。



理工学部 建築都市デザイン学科 5回生 長谷川 洋信さん

『人生の疑問に答えます』

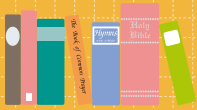
養老 孟司、太田 光 著 ; 養老孟司製作委員会編 (日本放送出版協会) 2007年

人生を生きていく上で誰もが抱く疑問に、「バカの壁」の養老孟司氏と「爆笑問題」の太田光氏の二人が答えていきます。

夢と現実との折り合いのつけ方、職場での人間関係、家族・子供との向き合い方など、学生である私たちがこの先出会うであろう人生の疑問はたくさんあります。しかし、この本を読めば“悩んでも考えすぎない”モノゴトの捉え方が身につき、無意味に悩むことが少なくなるはずです。また、普段の生活での何気ない疑問が、少子高齢化社会や教育問題など現代日本が抱える大きな問題に深く関わっていることにも気付かされるでしょう。

人生を力強く、そして賢く生きていくためのヒントが散りばめられた一冊です。





「働き方・生き方」本特集



経営学部 国際経営学科 4回生 宮川 真一郎さん

『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?:身近な疑問からはじめる会計学』

山田 真哉 著 (光文社) 2005年

私はこの本を大学に入学してすぐに読みました。本書には、さおだけ屋経営の話だけでなく、7つのエピソードに分けて、経営と会計のしくみが説明されています。私が本書の一番の特徴だと思うことは、全てのエピソードが、「身近な疑問」から生まれている点です。私は本書から、会計の基本だけではなく、全ての物事には理由があることを学びました。私は本書を読んで以来、ちょっとしたことにも疑問を抱き、考えたり、調べたりすることを心がけています。常に「なんで」の意識を持ち、その答えを追求することは、その物事に対する理解を深めることや、新たな発見をすることにつながります。読みやすい本なので、多くの人に読んでもらいたいです。



情報理工学部 情報システム学科 4回生 高橋 雪子さん

『働く人の夢:33人のしごと、夢、きっかけ』

日本ドリームプロジェクト 編 (いろは出版) 2008年

この本は、異なる仕事を持つ33人の方の働く姿を一冊にしたものです。私は以前から、学部の専攻や将来考えている職業に関係なくいろいろな職の方から話を聞いてみたいと考えていました。そんな思いを満たしてくれたのが本書でした。公務員や営業マンなど馴染みのある職から、NPO代表や花火職人などの普段あまり耳にすることのない職業まで、紹介者の職は様々です。職も年齢も違う彼らに共通しているのは皆仕事を軸にライフスタイルを構成し、そして仕事から充実感を得ていることです。とても素敵なお働き方だと思います。5年後、10年後に私も彼らのような働き方をしたいと感じました。

将来を、仕事を軸に考えている人はぜひ本書を一度読んでみて下さい。



理工学研究科 創造理工学専攻 2回生 戸田 武志さん

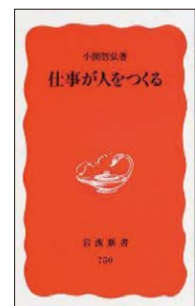
『仕事人が人をつくる』

小関 智弘 著 (岩波書店) 2001年

本書には、働きながら仕事の奥行きを発見し、成長し続ける技術者が描かれています。登場する技術者は、フェラーリを支えている研削工、携帯電話の普及を加速させた職人等々。

彼らは自分の哲学をもち、それを進化させ、自分自身の人生を生きています。そこには仕事があり、仕事は彼らの多くをつくっています。それは、社会人である先輩や同期を見ていて強く感じることであります。

私は『仕事』というフィールドにこそ、魂を揺さぶる何かがあると考えています。いわゆる就活本を読むのもいいですが、『仕事とは何か?』を考える一つの題材として、本書を読んでみてはいかがでしょう?





経営学部 経営学科 2回生 高瀬 雅士さん

『人を動かす「ほめ言葉」：仕事がデキる人の秘密の話法』

本郷 陽二 著 (中央公論新社) 2008年

皆さん、上司、部下、同僚など実に様々な人々と係わり合いが生じる社会の中で、スムーズに仕事をこなしていくために必要なものは何だと思えますか？

答えは「人間関係」です。その「人間関係」を作り出す基本である「言葉」の中から、今回は「ほめ言葉」をクローズアップしたこの本を紹介します。

細かなシーン別に対応して書かれている「ほめ言葉」の数々、簡潔な内容でまとめられている使い方の極意など、この本を読めばすぐにでも実践してみたくくなります。存外に知らない「ほめ言葉」の使い方を習得できるこの一冊。社会に出たら人付き合いを大切にしていきたい人はもちろん、大学生活の中で積極的に輪を広げていきたい人にもお勧めです。



情報理工学部 メディア情報学科 3回生 伊藤 早紀さん

『陰日向に咲く』

劇団 ひとり 著 (幻冬舎) 2006年

「どんな人間で、何を思って、何のために生きてるのか。自分でもよくわかってない。」これは、本書三つめの話「ピンボケな私」に出てくる文章です。私はこの文章を読んで、改めて考えさせられました。

本作品は、“人生を不器用に生きる人々の話”です。読みやすい文章の中に、驚き、感動、笑い、さまざまな感情が溢れています。登場人物たちは、自分の人生を少し遠回りしてしまいました。それは決して悪いことではありません。本当の自分を見つけ、生きる意味を見つけるすばらしいプロセスなのです。

あなたは自分の人生を振り返ったことがありますか。この一冊を読むことで、自分自身を見つめ直すきっかけになると思います。



理工学研究科 創造理工学専攻 2回生 藤村 紗矢さん

『理系思考：エンジニアだからできること』

大滝 令嗣 著 (ランダムハウス講談社) 2005年

本書はエンジニアからコンサルタントへ転身した著者によるエンジニアへの応援本です。理系人間の私が就職活動を前にして将来を考えているとき、本書に出会いました。エンジニアに対する暗いイメージがあるなか、「いまの時代、最もつぶしがきいて自由度が高いのはエンジニアだ」と著者は述べています。理系人間が持っている論理的思考・おもしろがり精神・技術的なセンスはエンジニアに限らずどんな職業でも役に立ちます。これからは理系としての勉強だけでなく、そこにプラスして“理系思考”も磨いていきたいと感じました。将来エンジニアとして活躍したい方、理系だけれどエンジニア以外の職業に興味ある方に一読してもらいたいです。



学生の学生による 図書館活用術



森口 幸祐さん
政策科学部
政策科学科 4回生



出口 明広さん
情報理工学部
知能情報学科 4回生

—— 図書館が提供しているデータベース（以下DB）について今回学生ライブラリストaff（以下LS）のお2人にその魅力をたっぷり語っていただき、より多くの学生にその存在を知ってもらうきっかけとなれと思います。普段使っているDBの利用頻度、使い方などについて教えてください。

森口：一番多く使うのは**RUNNERS**です。ゼミなどで疑問が生じた時に、人物名で検索をかけてみます。3回生になってからは、論文検索のDBである**Cinii**を使うことが多くなりました。僕は民法のゼミに所属しており、卒業論文の執筆を進めているので、Ciniiを使った論文検索がこれからより増えていきそうです。

—— **RUNNERS**で、キーワード検索をする際のコツがあればぜひ教えてください。

森口：「家」「住宅」に関心があり、関連の本を探していたことがあったのですが、「住宅」というキーワードでは検索してもヒットする資料の数が少なかったんです。ところが、その本を図書館に実際に探しに行くと、そのコーナーの周辺に「住まいの～」と書かれた本を偶然見つけたんです。検索してヒットした本の配架場所に行き、周りの本のタイトルや目次を眺めてみると、「住宅」のほかに「住まい」「住居」という言い方もあることに気づきました。ですから、検索したいキーワードを、同じ意味の別の単語に変えて検索してみると、ヒット数は増えると思います。

出口：僕も**RUNNERS**は頻繁に使っています。「詳細検索」機能や、衣笠の本を取り寄せるなどして活用しています。4回生になって論文を書くようになったので、**Cinii**と**JDream**をよく使っています。**Cinii**はほとんどの研究内容の概要が出てきますが、自分の分野以外のものも結構出てきます。僕の研究分野である生態系に特化したものは**JDream**に多いので、専門的なことは**JDream**で調べています。
1~2回生時は新聞記事検索のDBである**日経テレコン**

21とか**ヨミダス歴史館**を使っていました。

僕は教職課程をとっていたのですが、教育に関する記事が読みたくて、日経テレコン**21**で「教育人権」「ゆとり」などというキーワードからジャンル別に調べていました。不要な情報も目に入ってしまいう新聞と違って、DBは自分のほしい情報がたくさん出てくるので、その点では利用しやすいと思います。

—— **Yahoo!**や**Google**等の検索エンジンとDBとの違いは何だと思いますか。

出口：検索エンジンで調べたものは信頼度が落ちます。誰でも気軽に書き込みができるので、裏づけを取っていることを立証できないからです。DBの情報は、裏づけがとれており、何年分のデータなのか明記されているので、その点がメリットだと思います。

森口：政策科学部では、1回生で、時事的な問題について政策ディベートを行うので、立論のための根拠が求められます。論理的であるだけでなく、説得力が勝敗の分かれ目なので、いかに多くの情報を集めてくるかで差がつかます。**聞蔵II**、日経テレコン**21**を使っていましたが、何となくキーワードを入れて闇雲に検索していたため、なかなか根拠として求める記事にたどり着かず、使いこなせていませんでした。

—— DBのより詳しい使いかたを知るきっかけとなったのは？

森口：2回生の秋に学生ライブラリストaffになってからです。新聞記事検索については、検索講座の講師を務めることもあり、必要に迫られて知っていくことになりました。

—— ところで、1~2回生で知っておいてほしいDBがまだ出てきていないようですが、学習・研究する際に使うキーワードの定義を調べる時に役立つDBがありますよね。

今回紹介された
DBはすべて図書館HPの
「論文・記事検索（データベース）」
をクリックすると利用できます。

図書館HP「論文・記事検索（データベース）」
<http://www.database.ritsumei.ac.jp/subjgw/>



出口： JapanKnowledge です。JapanKnowledgeの良い点は、例えばAの会社を調べればそこからBの会社、Cの会社というように、繋がりを知ることができるということです。また、本文のキーワードにマーカーが引いてあり、色で区別することもできるので、キーワードごとに読んでいけるのもJapanKnowledgeの醍醐味だと思います。

—— 学習する際に、言葉のもつ学術的な定義を最初に調べる必要はありますね。図書館で行っているガイダンスでも、まずJapanKnowledgeで言葉の意味を調べてから、RUNNERSやCiNiiにいこうアナウンスしています。まず初めに使ってほしいDBです。「和書コンテンツ」は知っている便利なDBですが、それについて教えてください。

森口： RUNNERSで検索した資料の目次と要旨を見ることができます。僕は本の概要をつかむのに「目次」と「はじめに」の部分を読んで、借りるかどうかが決めます。それを、実物を探しにいかなくても見ることができるのは利点だと思います。また、検索ワードを広げるために、「和書コンテンツ」の目次を見ると、関連するキーワードがあるので、そのワードで再検索するという使い方もできます。

—— 出口君の周りでは、DBも含めて認知度はどうですか？

出口： 低回生では認知度は低いです。日経テレコン21・ヨミダス歴史館などのDBを知っているけれど、学内でただで新聞が読めるというイメージが強すぎて、実際に図書館HPから検索画面に進めない人が多いし、新聞を読むほかに何ができるのか、また、その利用法に親しみがないように感じます。利用法については図書館主催のガイダンスに出席するのがよいと思います。僕は、RUNNERSはあるテーマに関する色々な本を探すためにあると思っているのですが、他の学生は、自分が探したい本の場所を検索するときにしかなかったのがもったいないと思います。理系はメディ

アセンター、社系はメディアライブラリーと分かれてしまっていますが、理系でもメディアライブラリーに役立つ本があります。そういうことの認知度は低いように感じます。また、言葉の定義を調べるにも、JapanKnowledgeでなくGoogleやウィキペディアのほうが認知度が高いので、JapanKnowledgeの利用を広めたいと思いました。

—— 最後にDBの魅力と活用する時のアドバイスをお願いします。

森口： DBを使えば時間をかけずに色々なことを調べられます。目的の資料だけを探すだけでなく、似たキーワードから他の本や論文を探すというように、「絞っていく」のではなく「広げていく」という意識をもってDBを活用してもらえたらいいんじゃないかと思います。

出口： 僕も「広げていく」方向にDBを使ってほしいと思います。たとえば、タイトルをだまかに区切って調べれば、同じ分野の本をたくさん検索することができます。また、著者で調べるなら、その本の著者Aの参考文献の著者Bを検索します。すると、両者のアプローチの仕方や考え方の違いがわかってきます。検索の仕方を工夫してほしいと思います。

—— 2人とも図書館やDBをよく使いこなして、自分の学習・研究に役立てていますね。これからも、LSとしてその知識を他の利用者にも還元してってください。

■ 図書館ガイダンスのお知らせ

図書館では、学部生・院生の皆さんの学習・研究支援の一環として、図書館ガイダンスを実施しております。図書館のデータベースの使用方法を一旦習得すると、学習・研究等のための情報検索の幅がぐんと広がります！Yahoo!やGoogleだけに依存しない学術的な情報収集の方法を知りたい方、専門的な論文の検索情報を習得したい方は、下記URLをご覧ください!!

<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/support/guidance/guidance.html>

図書館レファレンス（利用相談）サービスとは!?

衣笠図書館1F、メディアライブラリー2F、メディアセンター1Fにある「レファレンスカウンター」。ここでどんな質問が出来るか、皆さん知っていますか？レファレンスカウンターでは、レファレンスライブラリアンが以下のような調べものや学習のサポートをしています。求める図書や雑誌が図書館にあるか探す「所蔵調査」や、特定のテーマを調べるために必要な資料を探し出す「事項調査」、データベースの使い方、他大学図書館・研究機関所蔵資料の利用についてなど気軽に相談して下さい。

たとえば…

- ・「金融工学」について入門書を教えて欲しい
- ・都市計画を専門としている学会を知りたい
- ・生涯教育に関する最近の雑誌記事論文を知りたい

また、次のような質問にもお答えしております。

- 就活中なのだが、受験する企業の売り上げを調べたい
- ゼミ旅行でいく先の地図を入手したい
- 映画のランキングを調べたい

POINT

事前に相談事項をできるだけ具体的に整理して、相談にきてください。
所蔵調査の場合は、学内の所在を調査した上でカウンターへお越しください。

詳細は、図書館ホームページ下記URLにて確認してください。

皆さんの学習・研究をサポートする「レファレンスサービス」。是非積極的に利用し、学習を深めてください。

 <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/support/refsrv.html>

展示コーナー紹介

図書館では、蔵書している図書資料の紹介や、利用者のみなさんの興味関心をひくような展示を行うことで、図書館資料に親しみを感じてもらいたいと考え、定例で展示を行っています。今まで貸出がなかった図書が借りられており、利用者の皆さんへ図書館が新しい知の世界を紹介したと言えるでしょう。

衣笠

図書館1階エントランスホールの展示コーナーを利用して、日常的に利用者の目に触れる機会が少ない貴重書を中心に、季節感、京都の諸行事などを織り込んだ展示を行っています。また、特別コレクションである立命館文庫（本学教職員・学生及び校友の著作など）の図書資料を、月変わりで展示紹介しています。11月は「本の世界展」を開催予定です。



立命館文庫

BKC

BKCには2館の図書館があるので、それぞれの図書館の特徴を生かし、メディアセンターでは、理系の貴重書を展示しています。メディアライブラリーでは、昨春秋、経済学部と連携し、学部主催の講演テーマと関連した資料の展示や、2009年国際天文年関連の展示を行っています。



メディアライブラリー



メディアセンター